

---

# 自殺霊

日午 俊矢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自殺霊

### 【Nコード】

N7036H

### 【作者名】

日午 俊矢

### 【あらすじ】

学生時代に聞いた怖い話に、どうしても忘れることができない話がある。「自殺霊って知っているか」

私が大学在学中に聞いた、いわゆる「怖い話」の中に印象深い話がある。耳にしたのは私の所属していたサッカー部の夏の合宿でのことだった。

合宿最後の日。私たちは夜遅くに「怖い話」を始めた。夏の定番である怖い話披露の場に、その手の話が好きな部員6名が集まった。「自殺霊って知ってるか」こう切り出したのは確か工藤だったと思う。甲子園を目指す野球部員のように頭を丸坊主にした男だった。以下の話は、その工藤が話した怖い話の全容である。

昔から、たくさんの人が自殺しているだろ。ほら、今もあるよな？ いじめを苦にしてだとか、会社をリストラされて借金地獄の末にとか。テレビとかでみるだろ。

あれ霊が起こしてるんだぜ？

あ、お前なんで笑うんだよ。俺は怖い話をしてるんだぜ。笑う話なんかじゃねえ。ちゃんと聞け。

お前ら、今自殺しようと考えている奴はいないか？ あ、そうか。じゃあ質問を変える。

お前ら、自殺する勇氣があるか？ 今死にたい気分じゃあないとか、そういうことは抜きにしろ。今ここで、首吊ってみる勇氣はあるか？ この建物の屋上までいって、ちよつと飛び降り自殺してみる勇氣は？

ああ答えは分かってるよ。いいこった、誰も死ぬ勇氣はないんだろつ。本当に良かったよ。

お前まだ笑ってるな？ 俺が話下手なのは認める。けど冗談じゃなく、本当に俺はほつとしてるんだ。

自殺したいと思っている奴にはな、憑いているんだ。霊がな。自殺霊って言うんだ。

昔も昔、お侍さんが責任取るとき何したかは知っているだろう。多くの人が見ている前で、刀で腹を割ったんだ。ようするに切腹だな。他にもな、戦で敗戦濃厚な時、もうだめだ、敵にこの首くれてやるなら自分の手だと、武士としてのプライドを持って腹に刀をさしたりとかな。俺はずっと切腹イコール武士の誇りだと思っていたね。ああ、本当は違うんだ。そんなんじゃない。切腹って、言い方は違うけれど、要は自殺だ。自殺が武士の誇りなわけではないだろ？

人はな、本来自殺なんかできない生き物なんだよ。

みんなも知っているとおり、切腹って言うのは一人だけ行うものじゃない。いや、一人の場合もあるか。でも大抵は切腹する武士の後にいるじゃないか。腹切った人が苦しまずに死ぬ手助けをする役目の人が。介錯人っていうんだったな。そいつは後から刀で首を落とすのが役目なんだ。一太刀で、こう、ズバッとな。そうすると斬られた奴は一瞬で、それも楽に死ねるんだそうだ。・・・あれは楽な仕事じゃないってこと知っていたか？首を落とすのは簡単そうに見えるかもしれないが、よほどの剣術の達人じゃないとできないことなんだ。首を落とすっていつても、首にはもちろん骨があるんだ。骨もだが、そもそも肉もそう簡単には切れないぜ。俺は実家が肉屋だから分かるがよ、そう簡単に肉は切れない。弾力で刃が戻されるから、うまく切ろうとすればコツがいる。介錯人は肉屋より大変だ。手元が狂えば首は飛ばない。何度も切る羽目になるわけだ。だから、そいつが下手だと、楽に死ねるところか、ひどく苦しい思いをして死なないといけなくなるだろうな。大変だぜ全く、下手な介錯は相手から恨まれる。実際に死者に呪われて大変な目に遭った介錯人もいるそうだしよ。

話が逸れちまった、すまねえ。話を戻すか。

その介錯人だが、切腹を助ける以外に違う役目があったんだぜ。何、簡単なことだ。

なかなか腹を切らない奴を問答無用に斬るんだよ。

あ？何だ？当たり前だと？黙って聞いてろよ。

切腹を助けるなんて、そもそも誰が好き好んで自分の腹を切るんだい？死ぬなんて誰もが嫌なことだろうが。この世で嫌なことのワースト3に入るよ、間違いなくな。

武士の誇りだ何だというが、本当はお侍も死ぬのは怖いんだ。いや、死ぬのが怖いんじゃない。その前が怖いんだ。腹を切った時の、えげつないほどの痛みがな。

だから介錯人は、こいつなかなか腹切りやがらねえと踏むと、一気に、それこそ問答無用で首を落としかかる。多分痛みを和らげるやら何やらの役目のことは完全に忘れていたんだろうと思うぜ。もう、こいつ目ざわりだから斬る、だよ。

まあ、仕方ないよな。自分で腹を切れる奴なんていないんだから。知っているか、自分で腹切って死んだ人の数より、介錯人の手だけで死んでいった人の数の方がはるかに多いうって言うことを。

もう一度言うがな、人は自殺できる生物じゃあないんだ。いくら武士の誇りを持ってこようが、銃を頭に突きつけられて自殺しろって言われようが、無理なもんは無理なんだ。

生物には生きようとする本能があるからな。小説なんかで良く聞かないか？眠るように死んでいくっていう筋書き。あれ、嘘なんだぜ。

眠るように死ぬ奴なんかいない。他人の目からは「眠るよう」に映るかもしれないが、それはあくまで表面上だけだ。そこでもうすぐ死のうとしている奴は、死に近づくにつれて酷くなる苦しみで大変な目にあっているというのに、誰もそのことに気が付かない。

そうだよ。楽に死ぬ方法なんてないんだって。体が死んでいくにつれて、苦痛はだんだん大きくなっていくんだからね。苦痛がピークになって、そこでやっと人は死ぬ。痛みで気を失うことはもちろんある。だけど、死ぬその瞬間の苦痛はたとえ気絶中であってもお構いなしだ。残念だけどね、人は苦しみながら死ぬんだ。

人はそのことをちゃんと知っている。本能でね。お前らも知っている筈なんだぜ？自覚はないだろうがよ。

本能は、そのこわあい痛みから逃れようとして、自ら死に行くような自殺行為を絶対に許さない。だから自殺はできないわけだ。簡単だろ？

お侍の話に戻そう。どんなに高尚な武士道を並べたって、人は自分で自分を殺せねえ。それが本能だよ。「自殺するな」と生まれたときから刷り込まれているんだから当然のことだ。ま、仕方のないことだ。

だがな、稀にだ。何百人かに一人の侍は介錯を必要とせず、自分で腹を掻つ捌いて死んでいったというじゃないか。

意外だと思わないか？本来はできない筈の自殺っていうやつを、堂々とできるっていうんだから。これは異常事態だぜ。

大昔のことを書き残した、古い古い文献にもその異常時のことは載っているらしいな。

その武士、自らを殺生せしめしとかな。

何でも、その武士にはまるで生気が感じられず、まるで死の神が取り憑いたようであるべし、って書いてあるそうだ。ほう、昔の書きものも、なかなか面白いことが書いてあるじゃないか。

何人も人を斬ってきた武士も、自分で腹を開いて死んだ人の顔は忘れられないと言ったそうだ。その顔は、もう死ぬ前から死人のような土気色をしていて、そのくせ目はぎらぎらと光っていてな。さっきも言ったな、まるで死の神に憑かれたような人間になってしまっていたってよ。

昔に比べて今は怖いよな。自殺者のニュースが新聞でもテレビでもでているじゃないか。飛び降り、首吊り、焼身自殺、なんでもありだ。日本ではまれかもしれないが、拳銃自殺なんかもあるしな。どれで死んでも結果は一所だ。人生で最高の苦しみを抱えて死ぬ。本当に嫌な世の中だよなあ。

だけど、不思議に思わないか？なぜこうも自殺者がでるんだ？自殺者なんて、生物の本能とやらを考えればでない筈だろうが。ほら、死の神やらが取りつかなければ、の話だがな。

ここで、やっと幽霊の話だ。前振り長いと言われる覚悟で話してきたが、意外とお前ら、黙って聞いてくれていたみたいでこちらは助かっているよ。

自殺霊って知っているか？知らないか。人を自殺させようとしてくる、怖い幽霊のことさ。何度も言う、あの神、死の神だ。

この幽霊はな、人の弱みに付け込んで心の中に入ってくるんだ。そして囁く。死ねてな。ああ、俺は囁かれたことはないよ。だから本当に死ね死ね言うてくるのかは知らないね。もし俺が一回でも過去に囁かれたって言うのなら、この合宿に俺が参加していて、今こうして怖い話を語っているのはおかしい話だ。だって、一度自殺霊に憑かれたら最後、絶対に自殺から逃げられないからな。

俺、最初に聞いたよな。今、本気で死のうと考えている奴はいないか、って。考えるだけなら誰だってあることだ。考えるだけならな。だが実行はできない。できるはずはないんだ。できる奴は自殺霊に取りつかれているからできるんだ。

俺が嫌な世の中だと思うのはだ。昔の武士たちは、その覇気で自殺霊の侵入を防いでいた。だから切腹も稀だった。だが、テレビをつけてみる、みんな首をくくったり飛んだりしている。武士のような覇気がないから自殺霊にとり殺されてしまうんだ。本当に嫌なもんさ。この中の誰かが明日には自殺霊に取りつかれて一線を越えちゃうかもしれないね。もしかしてこの俺が、かもな。ああ、それはないかな。ははは。

気休めだが、逆に言えば、自殺霊に取り憑かれなければ死ななくて済むんだ。乱暴な言い方だが、たとえうつ病になろうが、勤める会社が倒産しようが、好きな娘にフラれようが、絶対に自殺できない。死ななくて済むんだ。

だが、気をつける。自殺霊に俺たちの好運不運なんて関係ねえ。宝くじで三億円があたった瞬間に取りつかれちまったらそいつは自分に火をつけるし、サッカー選手になる夢を叶えたとしても、自殺霊に付け込まれた次の日は樹海行きだぞ。

これが同じサッカー部に所属していた工藤の怖い話である。話し終わったあと、彼は私達を見渡して得意げな顔をしたものだ。

私も何か話をしたはずだが忘れてしまった。確か心靈スポットに関連した話だったと思うのだが。

学生時代のワンシーンである。そこで湧いて出た怖い話、恐怖の体験など知れたものかもしれない。先ほどの工藤の話も、改めて聞けば粗が多いと感じるだろうし、他の部員の話も知れたものだ。眉つばもいいところなのが面白いのだ。

だが、どうしても私には工藤の話が不気味に感じられて仕方がない。けして怖いのではない、気持ち悪いのだ。実際に肉親から自殺者が出た者の身からすれば、このような自殺にまつわる話を聞くのは怖い以前に気持ちが悪い。

私の兄が15歳の若さでこの世を去ったのはもう大分前になる。今ではもう過去のページとも言えるかもしれないが、傷跡に近いページには違いない。

彼は三歳年上だったから、私が十二歳のころの出来事になる。いつもと変わらない日。夕御飯の支度ができたから兄を呼んできてと母に言われ、私は兄の部屋に向かった。

嫌な予感も何も無かった。兄の部屋のドアを開くまではいつも通りにその日は進んでいたのだ。

ドアを開いてすぐに兄が目に入った。天井につるした制服のネクタイに首を引っかけた状態。足は宙に浮いていて、すぐそばにディスプレイが倒れていた。

すぐには何が起こっているのかは理解できなかった。部屋が暗かったこともその要因の一つだったのかもしれない。私が母を呼びに行くまでに、一分間はそこに立っていたようである。

大切な兄を亡くしてからの私は深く沈んでばかりいた。兄と一緒に、

今までの私も死んだようだった。周りからも私が以前の私では無くなつたと言われたのが辛かった。

なぜ兄は死ななければならなかったのか。馬鹿馬鹿しいことに、今も昔もなくならない、学校内のいじめが原因であつたようだ。私はいじめの経験がないまま学生生活を過ごすことができたが、それがいかに幸せなことだったか身にしみて感じている。

いじめの経験の皆無な私が、兄の苦しみを語ることがとてもできそうにない。果たして彼を死に追い込んだものがどれぐらいのものだったのだろう。

ここに私の兄が残した遺書がある。あの日、机の上に置いてあつたものだ。

突然ですが、死ぬことにしました。未練がないと言えば嘘になります。楽しい人生、充実した人生を送ろうと思つたのに、どこで間違つたのでしょうか。僕は果たして何をしたのでしょう。気がつけば、学生生活もまともに送ることができず、いつの間にか死ぬことばかりを考えていました。本当は大好きな絵の勉強をして、とても立派な画家になろうと思つていたんです。でも僕には無理だった。せめて、宗次には僕みたいな人生ではない、立派な人生を送つてほしい。お前ならできるだろうと本当に思っているんだ。だからこんな兄を信じてほしい。書きたいことはまだあつたはずだけど、もう早く死にたくなつてきました。最後に、お父さん、お母さん、そして宗次。今までありがとう。

この遺書は形見としてずっと持っているものだ。気がつけばもう十年以上経つ。たまに見返すが、其のたびに兄の無念が伝わってくる。手紙の中にいじめのことが全く書かれていない所に、いかに兄がいじめを憎んでいたのかが分かる。

兄以外にもいじめの対象はいたそうで、兄の死がきっかけとなつて露わになつた形だ。確か、いじめを行っていた生徒グループは学

校側から何らかの処分が下ったはずだ。その内容は覚えていないが、到底納得のいく処分ではなかったのは確かだ。

いじめによる死が実際に家族から出たのだから、私がどういう気持ちで工藤の怖い話を聞いたのかは察して欲しいところだが、それはかなわないことだろう。私にいじめの本当の凄惨さが分からないのと同じようなものだと思うている。

だが、私が工藤の話に妙に引つかかりを覚えるのは、ただ兄が自殺をしたことを思い出すからだけではない。

実はというと、今だに私は兄が自ら首をくくったことを信じることができずにいるのだ。目の前で兄が死んでいるのを見たのに関わらず。

兄が死ぬ少し前のことだ。

兄は遺書にあるとおり、絵を描くのが大好きで、将来は絵描きとして活躍していくのだと弟である私にも言っていた。暇があればノートにデッサンを描いていたし、実際に絵もすごくうまかった。どこかの優秀賞にも選ばれたのだから立派なものだ。

その兄が私に言ったのは、もうそろそろすごいものが完成するぞ、というものだった。

実際にその絵を見せてもらったが、実にすばらしいものだった。

兄とは違って、絵が出来な私にはそれがどのように素晴らしい絵だったかを言うことは難しい。鳥が空を駆け、海が綺麗な絵だったことは覚えている。

美術部員だった兄は、毎日筆をとり、少しずつその絵を完成させていったのだという。どうやら、顧問の先生や、他の部員からも期待されるほどのものだったらしい。

その絵が完成しないまま兄は死んでしまった。家に顧問の先生がやってきて言ったことは、本当にあの絵、「希望と空」という題であった、をみることができずに悲しいということだった。あれは本当に希望を形にした、すばらしいものだったと何度も繰り返し言うのだ。

いじめを苦しめながらこの作品を書き続けることができたのは先生には信じられないとも。

私が兄の自殺を信じられないのは、その「希望と空」のせいだ。なぜ、その絵の完成を目前にして兄は首を吊ったのか。なぜ、いじめに遭いながらも「希望と空」を描くことができたのだろうか。

いじめは本当にあった。実際に兄がどのような仕打ちを受けてきたのかを私もよく知っている。だが、本当に兄は自殺を考える程に苦しんでいたのだろうか。

私にはどうしてもそうは思えないのだ。笑われるかもしれないが、兄は工藤の言う、「自殺霊」の餌食になったのではないか。そして、いつもそれは有り得ないことだと心の中で笑うのだ。

死体の第一発見者は娘の雪奈だった。彼女が中学校から自宅へと帰宅してからしばらくしての発見だった。

事前に両親から、帰ってくるにはまだ買い物中かもしれないから、鍵をあげて家で待っていてと言われていたので、帰宅しても誰もいないのは心得ていた。唯一つ不審に思ったのは、鍵が開いたままだったことだ。

ただいまと言っても全く反応がない。家に行くと、リビングのテレビは点けっぱなしになっていた。きつと両親が鍵をかけたただけだと思いなおし、鞆を片付けたあと、自室で次の日の授業のために予習を始めた。

彼女の母親が帰ってきたのはそのすぐあとだった。スーパーで夕飯の買い物をしていたという。

帰ってきたのは母親だけだったことを不思議に思った雪奈は、父親はどうしたのか聞いた。当然、父親も一緒に買った物だと思っていたからだ。

そう言う母親は不思議そうな顔をした。家で留守番の筈だがと言う。

もしかしたら自分の部屋にいてもかもしれない。そう思った雪奈は父の書斎へと向かった。

突然のことでお前たちには申し訳ないという気持ちがいっぱいだが、お父さんは死ぬことにした。

死亡保険には入っているし、財産も三十年近く働いた貯えがある。だから金銭面の心配はいらないよ。

もうお父さんは疲れた。こういうと身も蓋もないかもしれない。だが、これがお父さんが死ぬことを決めた一番の理由だ。もうこれ以上生きてもこの先知れたものだということを悟ってしまったと言ってもよいかもしれない。

亜紀子、今まで私と共にいてくれてありがとう。そして雪奈、これからもすくすくと育ってほしい。お父さんからはこれだけだ。

死亡した佐伯宗次の妻、佐伯亜紀子は、夫が自ら首を吊ったことを信じられない様子だった。彼女は通夜でこう述べている。

「一週間前、家族で約束したのです。もうすぐ娘が高校に入学する祝いで海外旅行へ行く約束です。夫が嬉しそうな顔で提案するものですから、私も娘も乗り気で……。なぜ、何で自殺なんか……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7036h/>

---

自殺霊

2010年12月9日14時35分発行